

【研究課題】

乳幼児突然死における RS ウイルス感染症の病態解析

研究期間：2020年12月28日～2025年3月31日

過去 18 年間で解剖された 3 歳以下 329 例中、RS ウイルス感染が判明した症例は 22 例であり、これらの検体 FFPE から RS ウイルスの免疫染色や Substance P 染色、GFAP 染色を施行した。その結果、RS ウイルスの免疫染色では気管支上皮に部分的に陽性像を認めたが、検体劣化のためか、全く染色されない例もあった。Substance P 染色は、神経組織に陽性像を認めたが、染色に有意差は見られなかった。脳症診断のため、GFAP 染色でクラスマトデンドロシスを検索したが、星状膠細胞の突起の断裂ははっきりしなかった。また、国立感染症研究所の病原体検出方法を参考にして、FFPE から RS ウイルスを検索したが、22 例中 2 例で検出が可能であった。FFPE から IL-6 の遺伝子発現解析を行ったが、発現が確認できなかった。生前感冒症状はあるが、RS ウイルス感染症とは診断されていなかった 79 例に関しても、FFPE から RS ウイルスを検索したところ、1 例から RS ウイルスが検出された。長期保存の FFPE からの遺伝子検査や免疫染色は難しいことが判明した。感染症の診断および重症化の解析を正確に行うためには、解剖時に適切な検体を採取、保存する必要があると再認識した。